

劇場用映画

救いたい!

Doctor's wish



■ 企画意図

2011年3月11日、東北地方は、未曾有の巨大地震に襲われました。多くの人々が身も心も傷つき、今もまだ、その誰もが将来への深い不安を抱いています。

しかし、あの日以前の東北の人々が、皆、豊かで満たされていたかという点、決してそうではありません。過疎化や高齢化の波は既に襲いかかっており、懸案の地域医療の脆弱化は、一向に解決の兆しが見えないままでした。

日本の各地域でも医師不足は慢性的に続き、小児科・産婦人科の医師の数が際立って減り続けていることは周知となりました。少子化が危惧されているのに、子供を持っても満足に医療さえ受けることが出来ない。一般の人々はそんな不満を口にしますが、最近では患者の無理解による訴訟が目立って多くなり、若い医師は恐れをなして小児科・産婦人科を敬遠——それゆえ、更に不足を助長するという状態が長く続いているのです。

さて、あまり知られていないのが、麻酔科医の不足です。小規模病院や地方の病院では慢性的に麻酔科医が不足しており、平日の手術が出来ない——週末に大都市から麻酔科医が出張してくるのを待つしかない——という事態に陥っています。

麻酔科医が不在のままでは手術をすることは出来ません。当然のことですが、私たちは常日頃それを深くは意識していません。手術を経験した人は、誰でも例外なく麻酔科医のお世話になっているのですが、それでも麻酔科医は身近な存在とは言えません。何故なら、麻酔科医が懸命に私たちを守ってくれている間、私たちは深く眠っているからです。皮肉なことに、事故でもない限り、麻酔科医の存在は、私たちの意識に強く残るものではありません。

ここに、『心配ご無用 —— 手術室には守護神がいる』という本があります。

著者の川村隆枝さんは、現在（独法）国立病院機構仙台医療センターの、麻酔科医長、手術管理部長、ICU 統括をされている方です。前半には麻酔科医になった経緯などが、明るい語り口で綴られています。後半に入ると、あの東日本大震災のちょうどその時、川村先生ご自身、仲間や部下、スタッフの皆さんが、どう対処し、どう患者を守ったかが語られます。

大病院で麻酔科医を束ねておられる川村先生は、手術室の中で患者を眠らせその身体を開いている状態で“あの時”を迎えたチームに、指示を出し対処しなければならない立場にありました。

手術は同時進行で幾つも行われており、それぞれの手術室では、スタッフが揺れ動くベッドを必死に押さえたり、さまざまな落下物から患者の身体を守るため、その上に覆いかぶさったりします。その場に居てそれを体験した医師たち自らの描写は、リアルで私たちの想像を絶しています。

高度最先端医療の現場、閉ざされた手術室の中でデリケートで緻密な作業を行う優秀なスタッフが、患者の身体を守るには自らの身体を投げ出すしかなかった“あの時”。手術を中止したり、何とか終わらせたり、とにかくも麻酔から目覚めさせ、患者を安全なところに運ぶ —— そのためにスタッフは全力を尽くしました。

映画では、2011年3月11日を経験した人々が、それぞれの立場でそれぞれの苦悩を抱えながらも前を向き、今を懸命に生きようとするさまを紡いでいきますが、その物語の核には、私たちがこれまで知らなかった麻酔科医たちの仕事や生活を捉えています。彼らの奮闘努力を描きながら、今なお続く、復興への“厳しく長い道程”の一端なりともを提示できればと考えています。

■ あらすじ

川島隆子は仙台医療センターで麻酔科医長を務める優秀な麻酔科医。夫の貞一も医師であり、仙台市街に自宅もある「川島医院」を開院し、立場は違えど医者同士、お互いの仕事を尊重しながら夫婦二人で仲睦まじく暮らしてきた。そして、2011年3月11日、あの未曾有の震災が起こった――。

突如、貞一は「川島医院」を無期限の休診として自宅を離れ、被災地で地域医療に従事するため診療所を立ち上げた。夫の我儘ではあるが、同じ医者として貞一の気持ちがかかる隆子は、多忙な日々の中、休日になれば海岸の町である被災地へと車を走らせ、貞一の溜まった洗濯物やら体調管理やらと女房の務めを果たしに行く。

その被災地で、地元の人々や多くの患者たちから信頼されている貞一。あの日乗り越えて少しでも前向きに生きようとしている人々の笑顔。この女房の務めで夫の支えになれることが、どこか隆子の心を朗らかにしていた。

そんな隆子には職場での心配事があった。それは医療センターの部下である若い麻酔科医・鷹峰純子のこと。彼女は震災で唯一の肉親であった父親を亡くしていた。そのトラウマから抜け出せない純子のことを、同じ医師として、女性として気に病んでいる。また父親の探索時に純子と出会った自衛隊員である三崎大樹は彼女に恋心を抱いている。お互いに心惹かれあっているのだが、大樹と会うと純子は父親のことをまざまざと思い出してしまい、どうしても彼を受け入れることが出来ずにいた。

川島診療所の看護師・吉田美菜は、その明るい性格から被災地の患者達の心の支えとなっていた。たまの休日にしか診療所に来られない隆子は、診療のことだけではなく、貞一の身の回りのことまで気にしてくれる美菜に感謝していた。美菜も震災で夫を亡くしていた。夫の実家である山間の農家で義母・ふみ江と慎ましく本当の母娘のように暮らす美菜。持ち前の明るさで、誰にでも接する美菜であったが、その心の奥底はふみ江にさえ打ち明けられない夫を失った悲しみに満たされていた。そんな美菜に、ふみ江も打ち明けられない悩みを抱えていた。

仙台医療センターで医長として様々な病状と多くの患者の手術を受け持ち、部下のメンタルにも気かけ、被災地に赴いては地域医療に孤軍奮闘する夫を女房として支える日々の隆子。実は、隆子にもかつて乗り越えなければならなかった悲しい出来事があった。二度も。それを乗り越える力を与えてくれたのは、隆子の仕事が「医者」という仕事であること。そして医者の本分を全うすることだった。

貞一の友人である岸義行は壊滅した水産工場を息子と二人で力を合わせて復活させた。その先にある岸の夢。

それは伝統の祭りを復活させることだった。少しずつではあるが、町の人々が力を合わせ祭りの準備が整っていく。そんな時に、ふみ江が倒れた。

駆けつけた隆子と貞一は、緊急手術のため仙台医療センターへの搬送を自衛隊のヘリに要請する。大樹を含めた自衛隊員たちに搬送されるふみ江と村添う美菜。そのヘリを純子と医療センターのチームが待ち受ける。悲しみや厳しい現実を受け入れながら、それを乗り越えようとする人々。

今を生きる、心やさしき人々のドラマが、今交錯する――。

■ 映画化概要

原 作 川村隆枝『手術室には守護神がいる』(パコスジャパン刊)

脚 本 古田 求 「四万十川」「バルトの楽園」「蝸ノ記」

監 督 神山征二郎「ハチ公物語」「最後の早慶戦」

プロデュース 鍋島寿夫 「蝸ノ記」「最後の忠臣蔵」「ハチ公物語」

制作会社 株式会社タイムズ イン

公開予定 2014年 秋 全国ロードショー(100~150館を予定)

出 演 鈴木京香
三浦友和
○
貫地谷しほり
中越典子
渡辺 大
土田早苗
宅麻 伸
藤村志保
津川雅彦

【作品に関する問合せ先】

株式会社 タイムズ イン

〒157-0066 東京都世田谷区成城 2-36-6 サンク成城 3F

Tel.03-3417-4841 Fax.03-3417-4842 <http://www.timesin.com/>

